

二〇一九年七月二六日

人波にぶつかる肩や町炎暑
満水のダム湖縁どる夏木立
浜木綿や綿津見神へ荒磯道
未来への手紙のポスト避暑ホテル

菜々
せいじ
たか子
こすもす

二〇一九年七月二五日

キッチン窓染めあげて大夕焼
神の杜滾る疎水の音涼し
手花火の子らの瞳に玉映る
ウエーブをなす千枚の青田波

菜々
やよい
素秀
宏虎

二〇一九年七月二四日

空谷に激つ瀬波や夏山路
夏雲を串刺しにして飛行雲
押し寄せるごとくに畳む青田波
松浜の樹間に沖のヨット見ゆ
避暑散歩遅れがちなる夫を待つ
猪のヌタ場と化しぬ滝の道

せいじ
智恵子
明日香
よう子
ぼんこ
たか子

二〇一九年七月二三日

雨晴れてより声高に蝉時雨
くろがねの岩をた走る滝涼し

ぼんこ
はく子

瀧道の瀬音左手にはた右手に

はく子

さながらに天降るミストや梅雨の滝
すつぴんを見られたくなくサングラス
大原女の木桶に受けし岩清水
屋敷町日傘すぼめて道譲る
満面の笑顔がみやげ帰省の子

せいじ
智恵子
みづき
そうけい
なつき

二〇一九年七月二二日

神木の 大樹の 殊に 蝉時雨

やよい

二〇一九年七月二一日

大夕立路面電車に駆け込みぬ
打水亭一番のりの客となり

なつき
みづき

二〇一九年七月二〇日

針穴へ糸やほどよき梅雨じめり
山巔に残る灯のあり明易し
白南風に沖の島影動くごと
海亀の足あと数多夏の月

満天
みづき
たか子
素秀

毎日句会みのる選・二〇一九年七月二八日